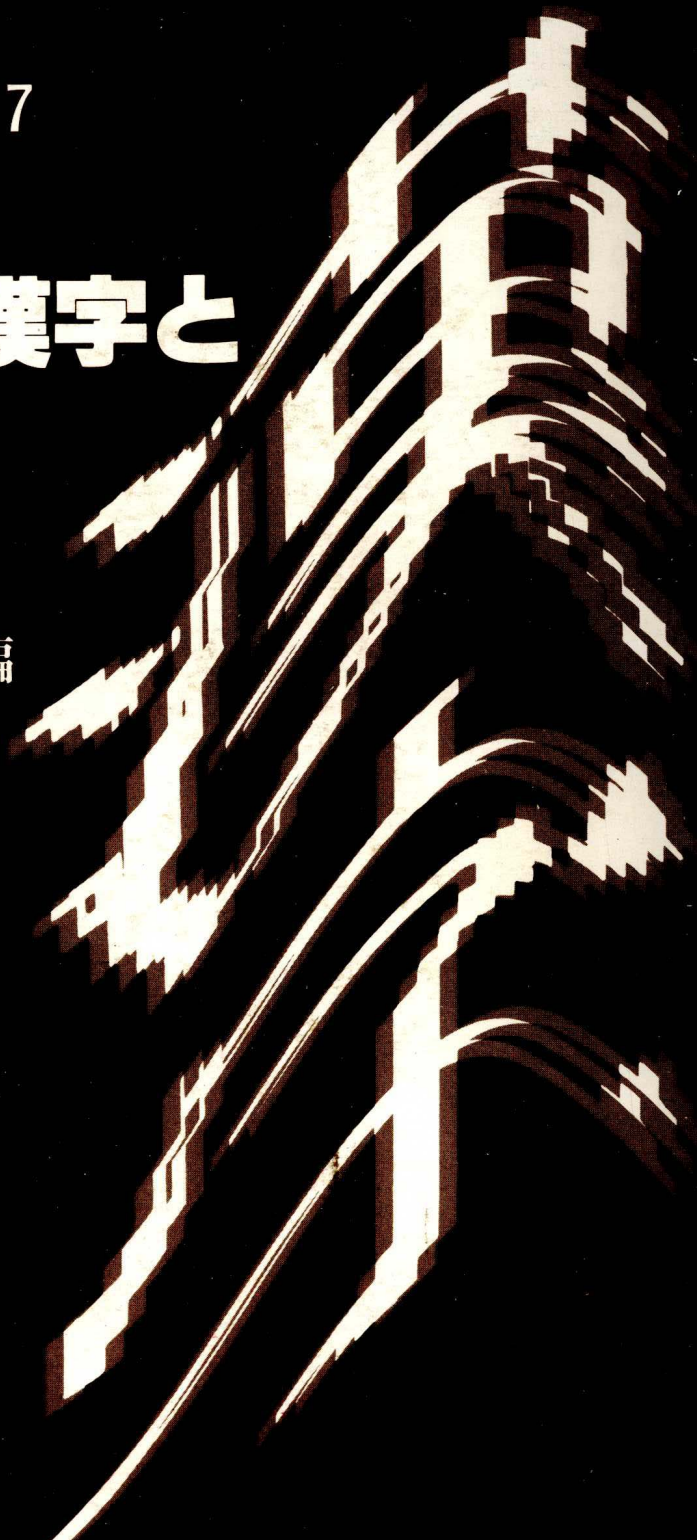


漢字講座＝ 7

近世の漢字と ことば

佐藤喜代治 編

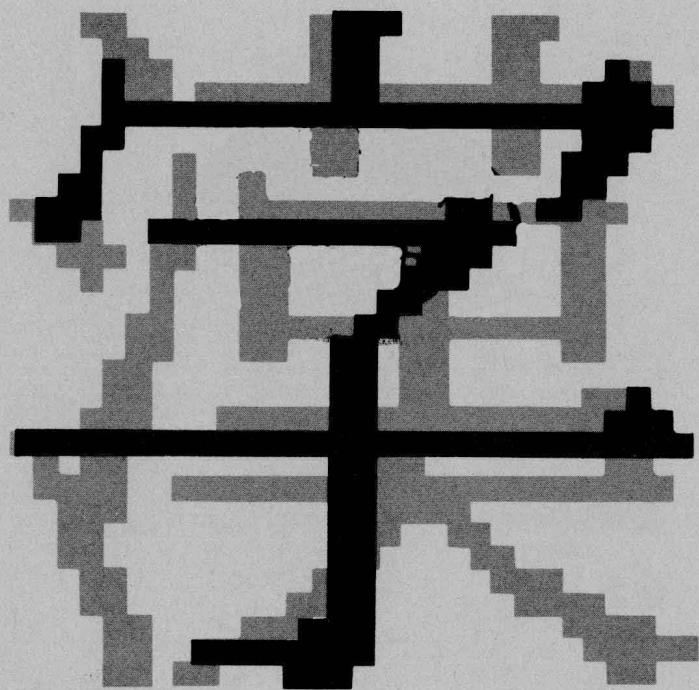
明治書院



漢字講座 = 7

近世の漢字とことば

佐藤喜代治編



明治書院

漢字講座

編者

佐藤喜代治

編集委員

遠藤好英

加藤正信

佐藤武義

蜂谷清人

飛田良文

前田富祺

第7巻 近世の漢字とことば

定価 3,200 円

昭和62年12月5日 印刷

© 1987 Kiyoji Sato
printed in Japan

昭和62年12月20日 発行

編者 佐藤喜代治

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中忠



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16 郵便番号 101
電話 (03) 292-3741 (代) 振替口座 東京 3-4991

ISBN 4-625-52087-8

星共社製本

編集のことば

中国において発達した漢字が、わが国に伝えられて後、長い歴史を通じて、日常生活を始め、文化のあらゆる分野に深いかわりをもってきたことは改めて言うまでもない。わが国では、中国と違って、仮名が発達したために、漢字の地位が絶対的なものでなくなつたとは言え、その重要さが減じたわけではなく、字音・字訓、また、振り仮名・送り仮名など、中国とは異なる、複雑で困難な問題が加わつたと言ふことができる。明治以来、国語国字問題が盛んに論議され、言語・文字の改革も何度か実行に移されてきたが、その中心の問題は常に漢字にあったと言ふことができる。漢字はいわゆる表意文字で、語と直接に結びつく、表語文字というべきものであり、単に文字として言語から切り離すことができず、国語と緊密な関係を保つところにその重要さが認められる。

漢字の研究は、従来、おもに漢学の専門家によつて進められてきた。国語の研究でも、古典研究の基礎として漢字を研究することが行われ、漢字音・訓点語・古辞書などの研究に見るべき成果をあげてきたが、漢字を国語との関連において系統的に研究することは十分に行われてはいない。

この講座において、漢字が国語の中でどんな役割を担っているか、漢字と仮名とがどのように使い分けられるか、漢字の性格と国語との関係を明らかにするとともに、従来、漢

字についてどんな研究が行われてきたかを顧みて現在の課題を考え、次に、古代から現代に及ぶ、それぞれの時代について主要な資料を選んで漢字使用の実態を概観し、さらに、機械化による情報手段の急速な進展に伴って、漢字は今後どのような革新を経ることになるか、国語教育、ないし日本語教育において漢字の指導をどのように行えばいいかなど、実際の問題を究明したいと考えている。執筆者各位のご厚意により、漢字の種々多様な問題について、過去から現在に至る実態を概観し集約するとともに将来をも展望して、漢字研究の進歩に資し、かつ、国語問題の解決、教育の向上に役立つことを念願するものである。

なお、各巻末に加えた付録では、漢字の様相を種々の側面から一覧して、漢字に対する理解を深めることができるように配慮した。

昭和六十二年三月

佐藤 喜代治

もくじ

近世の漢字とことば

鈴木 丹士郎

1	漢字の使用状況と問題点	一
2	特殊な漢字と漢字の特殊な用法	二
3	異体字・俗字	九
4	通用の漢字	一五
5	あて字	二四
6	残された問題	二九

出版文化と漢字

諏訪 春雄

1	はじめに	三
2	近世の出版活動	三
3	出版が漢字に与えた影響	三六
4	漢字が出版に与えた影響	四六
5	おわりに	五〇

節用集の漢字

菊田紀郎

1	節用集とは……………	三
2	「誤り」と注された漢字表記について……………	三
3	「ひげ」と「ひつじ」の漢字表記……………	六
4	漢字の清濁表示の変遷……………	六
5	世話字「一敷」……………	七
6	節用集の示すもの……………	七

仮名草子の漢字

佐藤亨

1	『恨之介』諸本における漢字……………	八
2	『犬枕』の漢字——『恨之介』（十行古活字版）との比較を中心に……………	八
3	『浮世物語』の漢字——京版・江戸版の比較……………	七
4	『浮世物語』の漢語……………	六
5	おわりに……………	一〇

浮世草子の漢字

浅野晃

1	西鶴が活躍した時代の用字……………	一五
2	『好色一代男』の用字……………	一九
3	『諸艶大鑑』の用字と『遊仙窟』の用字……………	二三
4	『本朝二十不孝』と『男色大鑑』の用字……………	二五

5	町人物の用字	二九
---	--------	----

俳諧の用字

赤羽 学

1	俳諧用字の特色	二四
2	宗鑑と貞徳の用字	二七
3	俳諧の視覚化と表記	三二
4	芭蕉の用字法	三五

川柳の漢字

前田 富祺

1	はじめに	一四三
2	『誹風柳多留』という本としての漢字	一四四
3	『誹風柳多留』の漢字使用の特色	一四七
4	『誹風柳多留』に用いられた異体字	一五一
5	おわりに	一五八

洒落本の漢字

彦坂 佳宣

1	はじめに	一六〇
2	漢字の含有率など	一六三
3	洒落本に共通の漢字	一六四
4	六作品の漢字とその性格	一六七

滑稽本の漢字

小松 寿雄

1 滑稽本の表記

一八〇

2 浮世風呂前ノ上の漢字量

一八三

3 ルビなし漢字——基本漢字への手掛かり

一八五

4 漢字で書くか仮名で書くか

一九〇

5 形容詞終止連体形の送り仮名

一九三

6 そのほかの問題

一九六

人情本の漢字

矢野 準

1 人情本の漢字量と振り仮名量

一九九

2 漢字の種類

二〇一

3 漢字と振り仮名との関係

二〇七

4 変字法の様式

二〇八

5 漢語風表記とあて字

二一〇

6 まとめ

二一四

読本の漢字

鈴木 丹士郎

1 字 体

二二九

2 特殊な漢字（漢字連結）と漢字（漢字連結）の特殊な用法

二三六

3 あて字

二三〇

4	用字・用語	三三
---	-------	----

白話小説翻訳本の漢字とことば

荒尾 禎 秀

1	資料とする『売油郎独占花魁』について	三九
2	傍訓つきの単字について	四四
3	傍訓つきの熟字について	四七
4	まとめ	五五

随筆と漢字——荻生徂徠の『南留別志』をめぐる二、三の考察——

村 上 雅 孝

1	荻生徂徠と『南留別志』	六〇
2	匹如身	六三
3	賢賢易色	六八
4	窈窕・君子・閑閑	七一
5	おわりに	七五

文書の用字と用語

相 原 陽 三

1	伊達家文書のうちの近世の書状	七九
2	文書特有の漢語と用字	八四
3	文書特有の和語と用字	九五
4	文書特有のあて字	九九

近世の漢字とことば

鈴木 丹士郎

1 漢字の使用状況と問題点

近世にはどのくらいの漢字が用いられているのであろうか。きわめて多種多様の漢字が用いられているであろうという先入主にとらわれやすいが、使用漢字の異なりは驚くべき数でなく近世でも表記に常用される字は存外はぼ一定の数に落着くことになるかもしれない。^{〔注1〕}研究が立遅れている近世における漢字の使用状況の実態を明らかにする作業を急ぐ必要がある。^{〔注2〕}

漢字の使用の多寡は文学作品にかぎってみてもジャンルによって大きな差がある。漢字ばかりで表記される漢文・漢詩は一方の極であり、漢字の多用に加え、これに振りがなを付す文章形態をとる説本などがつぎに位する。一方、かな主体の表記の中にまれに漢字がまじるといふような草双紙の類などは正反対の極に近い方に位置することになる。両極のあいだに諸種の表記形態をとる作品がある。表記は書き手の個人の事情でなく読み手の側によって拘束される

面のあることはもつと注意してよい。

一字一字の漢字（單字）については、字形は正体に対する異体というような字体が問題になる。字形の変容は表記内容と表記場面のちがいに密接なかかわりをもつ。近世では漢字が草体に書かれることが多いから書体の面も無視できない。この方は字体の類似を来たし、別字とまぎれたり通用したりする現象に拍車をかけることになる。また、中国と日本とで字義を異にする字が多いし、中国での構成法にならって、意味分野は草木類・魚鳥類などに多いなどのかたよりをみせつつも多くの漢字が日本で造られたりする。二字以上の連鎖は語（ことば）に対応する用字が問題になる。字の方から語をみようとする立場と語の側に立って字の方をみようとする立場が必要と思われる。^{〔注3〕}

2 特殊な漢字と漢字の特殊な用法

まず、特殊と思われる漢字と漢字の意味用法が特殊であると思われるばあいについてのべることにする。数多くある漢字の中からどれが一般の字でどれが特殊な字であるかを区別するにあたってはいろいろのみかたがあるし、またその判断には多分に主観的な面がつきまとい、問題は容易でない。ここでは日本で造られたと思われる字などを中心に扱うことにする。また、漢字の用法が特殊であるというのは、彼我とのあいだで用いかににおいて何らかの点で齟齬がみとめられるというようなばあいである。用例は問題になる字以外は現在通行の字体にあらためた。出典名なども同様である。

【咤 詭】『三条上ル室町で喧咤^{けんた}しだして』（堀川波鼓）下とある「咤」は字書にみられない字である。隣の「華^{くわ}」の代わりに「花」を用いたのは同音同義の字で通用させたものであろう。あるいは「華」を略しすぎて本来の正しい字形を失ってしまったものと考えられるかもしれない。『同文通考』省文に「咤^ッハ嘩也」とあり、参考になろう。「法

華」が「法花」と書かれるのも同様である。ところで「けんくわ」の漢字表記についてみるといろいろの書きかたがみられる。そのうち「喧嘩」と書かれることが近世では多い。

ばか躍かたびらまでや喧嘩筋 頼広 『続境海草』

刀のさやあたりたるとて喧嘩し 『清水物語』下

また喧嘩をせうと思つて 『浮世風呂』二下

たしかに「喧嘩」のように本来の書きかたになつたのがみられる。また「病犬^{やめぬ}のやうな誼誑だナ」『浮世風呂』四上」にみられる「誼」は「喧」と、「嘩」も「譁」と同音同義の字である。これらのほかに「喧花」が、

上下^{うへ}も下戸もばけ物もなし／君が代は喧花の沙汰も納りて 『大坂独吟集』

森右衛門、不慮の喧花を仕出し 『武道伝来記』一〇

のようにあるが、「花」は「訛」に通用させたものであろうし、「一はいきげんの誼誑眼^{まなこ}を見て取」『三の替藝品定』大坂とある「誼誑」は「訛」のばあいとまったく同様に「譁」の略体として用いたものである。また、「誼誑」
「誼誑」の書きかたもみられる。

作助ではないか、誼誑さすな 『傾城禁短気』四

民屋殿と吉田の誼誑の狂言のお相手にて 『役者節鑑心』京

【**枕**】中に浅黄のぬめのひつかへし、上に枕^{かた}つめのひつかへしに 『好色五人女』三一

木のへんに花の見ゆるや枕桜 寿哲 『ゆめみ草』

いずれも「樺」に通用させた字である。『ゆめみ草』の例は談林派俳諧によくみられる言語技巧を反映している事例としてとらえるべきものであろうか。あるいはこの字が「樺」の同字として広く用いられたことをものがたるものであるうか。「枕」は、また『国字考』に「枕^{せき} 葉の染なしたるは花の如くなるによりて作るなるべし」とあり、

『同文通考』国字にも「桧ヒノキと並ナリ紅葉也」とあるように、もみじを意味する国字であつたと思われる。

【桧】 光なき谷川てらせ桧鮒 玄攪 (『続境界草』)

桧狩山を屏風にかこはれて 末清 (『生玉万句』)

只の桧いはでの森や内気妻 露迎 (『誹諧東日記』)

この「桧」も国字と思われる。『和字正俗通』に「桧ヒノキ」、「国字考」に「桧ヒノキ 木色つくの意にて作れるなり」、「倭字一攷」に「桧ヒノキ 紅葉 色木二合」とあり、広く用いられたものであろう。

【桧 相】『境界草』に「生玉法印庭の杉を」詠みこんだ句として、「色かへぬ木へんに久し寺の秋」(寸計)とある。「杉」は木偏に旁の「久」が組み合わさって構成された字ととらえているが、「杉」が「桧」と書かれることが多くみとめられる。

桧板ヒノキにつけて焼たるとム (『好色一代男』一七)

檜物細工をする者、桧ヒノキの水さしまげる (『西鶴諸国はなし』四三)

酒ばやし桧ヒノキの木の間の月はれて 可秀 (『生玉万句』)

『正楷字覧』には「杉」の旁を「久」のように書くのは草体である旨の説明がみられる。運筆上、最後の画を左から右下へおろして止めた形が「久」のようになったのにもとづくものであろうか。『饅頭屋本節用集』には木偏に旁が「久」の字形がみられる。また『小野篁歌字尽』にも「桧ヒノキ」とある。また「杉」が「相」と書かれることが少なくない。

三輪の神とて能の中入／大木の相おりひらく声はして (『西鶴俳諧大句数』)

三輪のおくにて見る鹿の声／蹴あげては相の下枝にとまりたる 保俊 (『二葉集』)

『下学集』に「杉スギ日本俗或作ヒノキ相ヒノキ非ヒノキ歟」とあり、『同文通考』国字に「相ヒノキスギスギ杉也倭名鈔スギ杉俗用ヒノキ相ヒノキ字ヒノキ非ヒノキ相ヒノキ音於粉反

柱也按榼亦訛作^レ榼」とある。『集韻』に「榼、杉也」とあるが、「榼」を誤って「榼」と書くことが生じ、「杉」に通用させたものであろうか。『和漢三才図会』芸方・倭字に「榼、杉之俗字」とある。

【鉞】鉞かんもちを持って真那板まないたしらげに廻る（『本朝二十不孝』二一）

菖蒲刀ぬけば散りけり鉞屑　承計（『誹諧江戸蛇之餅』）

手きゝの工に鉞たみかんもてけづらせたるにひとし（『新御伽婢子』四）

「かな」は「鉞」を用いるのがふつうである。しかし『同文通考』国訓に「鉞カンナ平ニスル木器　鉞ヘ俗鉞ノ字……」とあり、『和字正俗通』にも「鉞カンナ」とある。毛利貞斎の『増続大広益会玉篇大全』では「鉞ヘ鉞カンナ…鉞刀。…案即鉞字」と説明する。この「鉞」は「鉞」に通用したものであろう。近世では「鉞」と書かれることが多いのである。

【衡】彼香炉を衡ちやうと銘をうたせられ、名物と成ぬ（『武家義理物語』一三）

酔ぬるや越川わたれば衡足　広寧（『ゆめみ草』）

「衡」は『倭字攷』にもみられ、『同文通考』国字に「衡チトリ鶴同上並信鳥也」とあり、国字であろうが、「鶴（本来はずめ）」とは動用字（偏旁の位置を置き換えた字）の関係にあるととらえることもできよう。

【悴】『書言字考節用集』に「悴セガレ本朝俗謂チ我子ヲ為レ」とあるが、「悴」には、せがれの意はない。この「悴」は「悴」と書かれるが、『漢字要覧』ではこれをせがれに用いるのは「本邦誤用ノ義」としている。近世では「悴」「悴」をはじめとしているいろいろに書かれる。

悴より弓馬の家に月澄て　西随（『生玉万句』）

手前にて安産いたさせ悴を取て（『傾城禁短氣』四）

一人の悴が片輪に成たと思ふて悲しかりしに（『役者美男尽』大坂）

不甲斐ない悴を持たゆへ年寄て入米いりまいがわるい（『諸道聴耳世間談』二二）

「世悴」「世悴」と書かれることも多い。

友かせぎ平目の契朽せねば／世悴生れて淡路嶋山　『誹諧江戸蛇之餅』

女房共来れ、世悴文六来れと　『堀川波鼓』中

然者私世悴、庖瘡相煩申候処難見放躰御座候　『新井白石日記』元禄七年二月一〇日

此世悴親にまさりて始末を第一にして　『日本永代蔵』一・二

「世」の字が加えられたのは「せがれ」をあて字のように表記しようとしたのではないかと思われる。これらのほかに、
悴子富吉に一銭の取かへもなされて下されな　『役者若見取』京
ひとりある盼が後／＼のためにもよし　『世間胸算用』三三

のように「悴子」「盼」もみられる。「盼」は『書言字考節用集』に「本朝俗字」とあり、『異体字弁』和俗字、『和字正俗通』にもみとめられる。国字として一般に用いられたものであろう。なお旁の「卒」を「卒」とするものはほかの字にもみられる。

きのふ酌し酔のまぎれに　『好色一代男』一五

絆目のすみに鋤のしづを入　(同 四六)

この「酔」「絆」はそれぞれ「酔」「絆」の俗字である。

【姫】 菊酒屋とて家名高き所へ姫らせけるに　『本朝二十不孝』一三

四ばんめの娘お冬をすぐに姫し給へといへば　(同 三一)

花姫を中につかんでかせ所帯　雪柴　『江戸俳諧談林十百韻』

「姫」は『増統大広益会玉篇大全』によると「ワカシ…少也又一譬辰名」とあり、よめ・めあわすの意味はない。『同文通考』誤用に「姫ヨメトリ俗娶字」とあるように「娶」と同義の字とみなして通用したものと考えられる。